



札幌市自然食品店「まほろば」社長 宮下周平氏

実は今月、第一線を退いて仁木町という田舎に移り住み、入植して農業を始めました。そんな私事でも記念すべき5月ですが、改めて『森下自然医学』誌600号達成、本当におめでとうございます。600号というと数えて50年、孜孜忽忽として、このような業績を立てられたということは、人跡ではないと考えるのですね。天が命じて、この人を遣わして成さしめた偉業、即ち天跡であると。まさに、森下会長の足跡は天業そのものである、と私は捉えています。

実はこの冊子を初めて手に取って巻頭言を拝見すると文語体なのですね。これは江戸時代か、明治時代の先哲の言葉を抜粋されたのかなと思いましたが、詳しく読むとなんと現代において、森下会長が文語体で書き記しているということが判り、びっくりしました。なぜ今文語体で書かなければならないのか。例えば、俳句があります。それを解説して書いたところで全くつまらないわけです。やはり五七五という骨格というか制約みたいなそういう縛りがあってこそ、匂いたつ情緒、風雅が出てくるわけですね。先生の書かれる文語体は、やむにやまれず書いた文調、つまり歴史的情緒なんですね。単なる文辞ではなくて、それは遠い過去から未来へつながる一連の言語である、と捉えているのです。日本ではこれを活きた言語、言霊というのですが、まさに先生の言霊こそ、その本質を捉えていると思います。

幾度か私は中国の長寿郷に随行、お供をさせていただいた際、その現場を拝見しました。村中、町中の皆さん、黒山の人だかり、大歓迎なのですね。これほど森下先生を慕っていらっしゃるのかと感銘を受けたのですが、その中のおじいさん、おばあさん1人ひとりに「何を食べているの？ よく働いているかい？」とたずねたり、脈拍や血圧を測ったり、あるいは水質を調べるなど、ずっと変わらず50年間やっていたことは、現代的な機器を使えばもっとも精度の高い結果や詳しいことを調べることができるのですが、実はそういうことではないのですね。

長寿と言えは日本人の方がもっと長寿だけれど、多くが寝たきり老人です。でも長寿郷の老人たちは、生まれた時から死ぬまでみんなに囲まれ、歓迎されて生活しているという、何というか日本の古い里村を思い出させるような中で、みなさん年を召されているのですね。人類の始原的なコミュニティというか、家族、村、そういう中で育まれた生命、という豊かさを感じるのですね。ただ寿命が長ければいい、延ばせばいいということではない。そこには人との情のつながりとか、村での共同生活の在りようといったものをすべて捉えているのが先生の探査、調査ではないかと思うのです。そこにはやはり、『鑿は仁術なり』というような精神哲学が根底にある。だから、愛であると感じるのです。医術の技ではない、医学という学問でもない、先生のなさっていることは、まさに鑿道であると思うのですね。つまり『道』です。道というのは、『鑿の心』というものを古代からずっと綿々と引き継がれてきて、将来、未来に継承していく心、道筋、その経緯を先生はお示しになっていらっしゃるのではないかな、と思うのです。

ギリシャのヒポクラテス、中国では華佗、扁鵲、日本には森下敬一居たり、と100年後、500年後、1000年後にも語り継がれる方だと思います。これからも森下自然医学が発展されますように。森下会長も100歳越えをされ益々活躍されて、現代の鑿聖、鑿学の聖人として讃えられますよう、私たちが応援して参りたいと存じます。森下先生、がんばってください！

5 森下自然医学 2016. 8.



※今年5月に開催された森下敬一先生の燦々会。「森下自然医学創刊600号記念セレモニー」では、宮下も祝辞を述べさせていただきました。自然医学8月号、に、あいさつ全文が掲載されましたので、転載させていただきます。

※『森下自然医学』8月号より転載